

新薄雪物語

地主権現花見の段

筆に書くとも及ばぬは清水寺の花盛り、地主の花見の花衣、花を飾りて華やかに、幸崎の一人姫、名は薄雪の薄からで、恋を含める花の顔、糸より細き柳腰、柳桜をこき交せて、都ぞ春の錦なる。

お傍去らずの腰元籬、

籬 「申し／＼姫君様、花の名所多けれど、地主権現の花盛り、ア、また言はれたものぢやない。木の下影を宿として、暫く床几にお休らひ」

と、申し上ぐれば、

薄雪 「オ、言やる通り、自らが庭の花とは事代はり、

一入色も美しう大内人も見給はん」

と、硯出させ擦る墨の、匂ひいや増す濃き紅の短冊に、かくぞ見えけり。

薄雪 「春ごとに見る花なれど今年より、咲き始めたる心地こそすれ」

と、筆ずさみ給ふを

見て、

腰元 「天晴れお歌なら御器量なら、今の世の小町様」と褒めつそやしつ手つ取り早う水引通し、振りよき枝に結ぶは神の結ぶかや、後の縁の橋となる眺めはいとゞ勝りけり。

腰元 「サア／＼これから観音様へお礼申さう。お越し遊ばせ、いざ／＼」

と、お手を取り取り腰元衆、心を付き付きお輦、舞台へ

上り行く後の、花の木元しづ／＼と、歩み来る園部の左衛門、その身は歌人の名に高く、

鍛冶の名高き国行諸共、

奉納の御剣を妻平に取り持たせ、参詣あれば。

清水寺の住僧出で向ひ、

住僧 「まづもつて今日の御参詣、私ならぬ公用。近頃御

苦勞千万」

と慇懃に述べらるれば、

左衛 「仰せの如くこの度の御剣、これなる来国行に仰せ付けられ、即ちこの影の刀を差し上げ、上覧に備へしところ、『御心に叶ひかくの如く打ち立て差し上げよ』との御誂。大切なる御剣の手柄と定めしこの刀。疎かになり難ければ、『清水の観音に奉納せよ』と仰せによつて、いよく御剣成就の御祈念頼み奉ると、先達つて申し通ぜし故、推参と存ぜしに、これまでの御出向ひ憚りあり。ヤア国行は未だ御対面申すまじ」

住僧 「ア、成程々々。拙僧は清水寺の住職、御閑暇の砌はお尋ねに預らん。シテ御家名はな」

国行 「私、栗田口の住人來国行と申す者。園部の家には御家來同然。以後はお見知り下さるべし」

と、互ひの挨拶事終り、

左衛 「然らばこの御剣を宝前へ、献上は国行と貴僧に頼み奉る」

と、劍の箱をお弟子に渡し、

左衛 「神の木とは申しながら大慈大悲の花なれば、一枝折つて家苞に」

住僧 「ア、苦しからず、如何程なりとも追つ付けお出でを待ち申す。後刻」

左衛 「後刻」

と国行諸共、登る坂中擦れ違ひ、降りる所体も乱れたる、薄雪姫は恋の花、園部はかくとも露知らず。

人なき床几に腰打ち掛け、

左衛 「なんと妻平、取り分けてこの桜見事でないか」

妻平 「ネイ／＼／＼、御意の通り。いつ／＼よりも盛りが見事でござります」

左衛 「成程々々、最前住持に所望致し置いたれば、手折つて帰らん」

妻平 「ハテ、どの枝を。それか、これか」

と見廻す内に、

短冊見付け、吟じ返し詠み返し、

左衛 「ハテ面白や。この歌の主は誰とも知らねども、結

び止めたる枝ながら、妻平、折れ」

妻平 「ナイ、ナイ」

と、枝を手折れば

姫は嬉しく、

薄雪 「これ籬」

籬 「おつと皆まで仰りますな。私次第」

と人知らず、二人契りし妻平が傍に差し寄れば、

『ハテ、思ひ掛けなくこゝへはどう』と言ふに言はれぬ

主人の供先、知らぬ顔して、

妻平 「これ女中、何ぞ御用かな」

籬 「アイ、ちよつと申さねばならぬ事」

妻平 「身共にな」

籬 「イエ、あなたに」

左衛 「とは何事」

と園部の左衛門尋ねれば、

籬 「オホ、この様に申すならば物咎めをする女

子ぢやとお叱りあらうが、その一枝は主ある花。折つ

てお帰り遊ばすは落花狼藉。元の様に接いでお返し遊

ばせ」

と、無理言ひ掛くるは

恋の仕掛けとも、知らぬ左衛門気の毒顔、

左衛 「その儀ならば眞平誤り、誤り。あまり面白き歌と

いひ手跡といひ、屋敷へ帰らば母にも見せ、御慰みの
ためと存じ思はぬ作法。その段は良き様に」

籬 「アイ、それならばこちの主幸崎の姫君薄雪様の

御堪能遊ばす様に、お前様直々にお断り仰つても、

御恥辱にもならぬ事。御苦労ながら、ナアお供の」

妻平 「そうぢやく旦那、こりやござらずばなります

まい」

左衛 「イヤ、女子ばかりの真中へ、若輩者の参る

べき様はなし。人の口には戸が立てられぬ。覚えなき

身に浮名を立てられ、互ひの難儀になるまい、とは言

はれぬ」

籬 「さつても難かし。そこを落すが肝心」

と、口々小声に薄雪も、『もしこの恋が叶はずばなんと

せう、どうせう』と思ひいや増す恋心、

うちつく素振り籬は辛気、

籬 「ア、これ申しお姫様、恥かしい事はござりませ

ぬ。ちやつとくお傍へ早やう、早やう。ア、これ奴

殿も奴殿。これ程こちらが言ふ事を取り持たうとはし

もせいで」

妻平 「これは迷惑。所詮言ふても埒明かぬ。旦那はお堅

い、この恋叶はぬ。ふつゝ思ひ切らしやりませ」

薄雪 「スリヤ叶はぬが定かえ」

籬 「姫君様、何とせう。この儘では一分立たぬ。サア

覚悟遊ばせ」

と、左衛門が差添抜き放せば、

左衛 「これは短気な、危なや」

と、刀奪ひ取り鞘に納むる

手を取つて、

籬 「及ばぬ恋を生半に、死なうと思ひ定めしを、かう

お止め遊ばすは叶へるといふお心かえ。もしもそうな

らつひそう」

と、口で言はねどこれかうと、じつと締むれば

締め返し、『必ず変り給ふなよ』『変るまいぞ』の手の内
に、驪山の契りや籠もるらん。

当寺の同宿、石段とんく、

寺僧 「左衛門様、まだこれにござりますか。住持申し付

けらるゝは国行殿もお待ち兼ね。只今お出で下さるべ

し」

と相述ぶれば、

左衛 「これはく、只今それへと存ぜしところ、御念

の入つたお使ひ。やがてそれへ参上。まづお先へ」

薄雪 「そんならお前はござんすか。大事なくばこゝにゐ

て」

籬 「イヤ申しお姫様。たとへばこゝにござつても肝心の

ところがな、サ埒明かぬ事言ふより、これな、これこ

の硯」

と、言はぬ思ひを延紙に、判じ物やら痴話文やら、筆の

立てどもしどけなく、桜の枝に掛けたは何ぞ、

左衛 「刃を描いたその下に、心といふ字読んだれば、

『忍べ』といふ判じ物。下の三日に園部の左衛門様参

る、谷蔭の春の薄雪」

薄雪「必ず待つぞや」

左衛「忍ぶぞや、それまではまづおさらばや」

と、袖振り分けて是非なくも、名残りを惜しむを右
左、連れて

清水寺の段

帰れど、帰らぬは、

水の流れと人の身の、先非を悔いて詮方も、千手の誓ひ
影頼む、国行が一子来太郎国俊は、父の勘気を赦されん
と、心に願ひの滝詣で、念彼観音の御名を唱へ、手には
櫓の一枝に、受くるや清き法の水。

七度結びて親と成る父の国行、非時の馳走の酔醒まし、
音羽の流れに手水せんと、坂を折節国俊がこゝにあると
も白糸の、滝の元に立ち寄つて、思はず見合はす我が子
の顔、『無事なかやい』と言はんとせしが、押し鎮め、

国行「ハア南無三宝、この滝はもう穢れた。穢れた滝を

見るは暫しも目の穢れ」

と、尻目にかけて引つ返す、

袖に縋つて、

国俊「申し親仁様、まづ暫く、暫く」

国「ナニ、親仁様とは誰が事。この国行子は持たぬ。
またたとへ子があつてから、面押し出して親と呼ば
るゝ覚えはない。ア、若い人ぢやが角相はあり内、そ
こ離されよ」

と、他人向き振切りれば、

また引き止め、

国俊「有難き親の慈悲、巢父といふ唐人の悪事を聞い
て穢らはしと、耳を洗ひし潁川の滝の流れをだに、穢
れしと見し許由が例を目の当り。御勘当の国俊に教
え下さる御厚恩、そもこの上の候べき。枯れたる木に
も花開く、観世音に立願して、七日に満する今日只
今、父の御目に掛かる事、有難し忝し。この上の
御慈悲には、御勘気御赦免下さるべし」

と、涙と共に搔き口説く。

国行も泣かぬ顔、

国行「オ、そううては叶はぬ筈。こりややい、かけ替
へもなき一人の子を勘当する親の心、子知らずといふ
世の諺。今合点がいかふがな。本心を見る上は勘当
赦すと言ひたいが、儘ならぬは義理世界。国々に鍛冶
も多けれど、取り分けて我が家、その家の子が刀一振
り得打たいでは、どうも勘当赦されぬ。いづれの鍛冶
へも立ち入つて鈍刀物でも打ち覚え、国俊と銘を切つ
て見せたらば、悦ぶまいか嬉しうなうてあらうか。
世間晴れての親子も親子、我が子よと言はれてくれ。
こりやこの親が頼むぞよ。さりとてはく儘ならぬ浮
世や」

と、老いの繰言繰り返す、胸の思ひは音羽山、滝や涙に
負けぬらん。

人の嘆きを身の幸ひ、とくより入り込む団九郎の、木蔭
より忍び出で、折節辺りに人もなし、

団九「サアこの隙に」

と、宝前に備へし以前の影の太刀、蓋押し開いて取り出

す用意の鑢調伏を、

父の難儀と露知らぬ、国俊漸う頭を上げ、

国俊「その御嘆きはこの身の錆より起こる事。本心の塗
り砥にかけ、血を分け給ふ父の鍛ひの直焼刃、頭はす
は今の事。現在親の傍にゐて、親と得言はぬ子の心、
御推量下さるべし」

国「オ、我れとても我が子を我が子と得言はぬ辛さ、
そちが思ひの十倍ぞや。必ず無事で」

国俊「親仁様、御無事でござつて下されませ」

国「といふ内も人が来る。早や帰れ、サ帰れ、帰れ。
身共も坊へ帰ろう」

と、引き別れたる別れの涙、

親子一世の別れとは、後にぞ

思ひ遣られたり。

団九郎は正宗の家に伝へし筋違鑢、常に変つて逆に擦
り掛け、陽を欠いて左を下げ、陰に旺して右を上げ、
金剋木に命を断ち、火剋金に世を乱す鑢の擦り方、天下
安穩長久を忽ち不吉に仕返へる早業。思ふ儘に調伏し

悪事を上むる箱の紐、引つ締むる
後より、

国行 「団九郎何召さる」

と声を掛くるは国行なり。

ぎよつとせしが、

団九 「イヤ何これは」

国行 「これはとは」

団九 「イヤ、名作のお剣なれば後学のためちと拝見と存
じて、今明けふとしたところ」

と、ぬつぺりと間に合ひ口。

国行 「イヤその儀ならば苦しからず。貴殿が父正宗は拙
者が親国吉が弟子なれば、元は同じ家筋。御不審あら
ば尋ねられよ。サア刀を見られよ」

と、言はれて敗亡、

団九 「イヤもうそれには及ばぬ事」

国行 「及ばぬ事とは無様。いで取り出して見せ申さ
ん」

と、箱の紐解かんとする、

『見付けられては百年目、もう叶はぬ』と後ろより切り
掛くるを、

国行 「心得たり」

と早速の国行、かい潜つて抜き合はせ、

国行 「子細は問はぬ。汝が悪心観念せよ」

と無二無三、上段下段、

団九郎叶はじと思ひけん、高欄より掛け作りへ、

国行 「ヤア逃ぐるとして逃がさうか」

と、引つ続いて貫を足場。

折から来合はす秋月大膳、目早き男、すは一大事と手
練の手裏剣、小柄取る手も見せばこそ、国行が肝の束
ね、うんとのつけにどうど落つ、敢なき最期は是非なけ
れ。

団九 「大膳様」

大膳 「ア、こりや、シイ。首尾はどうぢや。外に見付け
た者もないか」

団九 「お氣遣ひなされますな。思ふ様に調伏の鑢目入
れ、元の様にしたところ、この老いばれが明けうとし

て、危い事」

と死骸の小柄を引き抜いて、大膳が手に渡せば、

大膳 「ムウ出来いた。定紋のこの小柄、後日に知れて
は大望の妨げ。ソレその死骸、舞台の下、塵落しへ打
ち込めさ」

団九 「まつかせ合点」

と引ん抱へ、塵落しへ真逆様、

団九 「こいつがための南無地藏」

と打ち込む後から、引ん抜いて振り上ぐれば、
飛び退つて、

団九 「ア、これく聊爾なされますな。こりやまあ何
となされます」

大膳 「我れを切る」

団九 「とは迷惑。お望みの通り調伏の鑢目入れ、御用に
こそ立て仕落ちはない」

大膳 「サア、鑢目を入れたる事、他言させては大望の妨
げ」

団九 「ムウ、さては拙者めが他言など致さうかと」

と悦び勇み団九郎、命拾ふて立ち帰る。

渋川 「お旦那、お首尾は」

大膳 「こりや、シイ。さてく桜が咲いた」

と見廻し見廻し、枝に付けたる判じ物、

大膳 「こりやなんぢや」

と手に取つて、

大膳 「下の三日に園部の左衛門様参る、谷蔭の春の薄雪
より。ムウ、刃に心を書いたるは、さては彼奴らがく
さり合ふ合図の艶書。かうあらうと思ふた。エ、憎

し、憎し」

洪川「申しお旦那、お心が小さい、小さい。四も五もない、なんの園部を打ち殺して」

大膳「ヤア黙れ、何事も皆胸にあり。こりやかう、かう、かう、合点か」

と、ぐる／＼巻いて懷に、

入るとも知らぬ園部の左衛門、『国行が見えざるはいづくぞや』と、妻平召し連れ帰るさの滝の元。

左衛「秋月殿か」

大膳「ヤアこれは左衛門殿。一兩日はお物遠、御親父もさぞ／＼」

左衛「仰せの如く息災に罷りある」

大膳「まづは珍重、今日これへは何故」

左衛「イヤ、かの御剣を奉納」

大膳「如何様左様」

左衛「シテ其元は」

大膳「ちと花を見物と最前よりこれにをる。貴殿は最早やお帰りか。イザ同道申さう」

と目で知らせ、

大膳「両人共後から」

と、口と我が名は大膳人、大悪人に打ち連れて、園部は館へ帰らるゝ。

後に残つて妻平が、

妻平「べん／＼と待つてもゐられず。尋ねて来う」

と駆け出だす、

洪川「ア、こりや、待て、待て」

妻平「待てとは何ぞ用があるか」

洪川「ある段か、ある段か、大分ある。こりやこの鼻が首だけのあの籬。持ちをつたな、待ちをつたな。イヤサ女房に」

妻平「サア、持つたが大事か」

洪川「ヤこいつが／＼。頤の偉い」文奴。こりやなんぼう強い面してもその手は喰はぬ。頭から誤つて『洪川様 お望み通り籬を奥様に召されて下さりませ』と出直せ、出直せ。あのこゝなかなかす奴め」

妻平「ハ、ハ、ハ、成程、洪川様の仰る通り、『籬を奥

左衛「イヤ左様に存ずれども、今日これへ召し連れました来国行、いづくへ参りしか、これを尋ねて後より帰宅仕らん。まづお帰り」

と挨拶すれば、

大膳「こりや藤馬、最前この道をかう往たは国行、ぢやなかつたかい」

洪川「ア、ハ、成程そうでござります」

大膳「ムウ、歌の中山清閑寺へかな参つたもの。儘にして道々の物語。サ、ア平に同道」

左衛「ハア、然らば左様仕らん。こりややい妻平、そちは国行待ち合はせ、同道して帰るべし」

と、言へば

秋月、

大膳「こりや洪川、そちは歌の中山へな、妻平諸共」

左衛「イヤ、それには及ばぬ」

大膳「ハテサテ言はれな。苦しくない事。こりや六波羅での意趣などゝ、人なきを幸ひに口論など致したら手討ちだぞ、ナア、サ合点か」

様に召されて下さりませ』と申したらよからうが、マア嫌ぢや。こゝな馬鹿野郎め」

洪川「ムウ、しかとならぬか」

妻平「くどい」

洪川「くどい、すりやどうあつても、籬さんはおくれんかえ」

妻平「エ、くどいはい」

洪川「そんなら馴染みだけ花賀殿へ祝うて若水々々」

『女房呼んだら、川へぼつ込め、ぼつ込め』

妻平ふつと吹き出し、

妻平「フウ／＼／＼、テハ、ハ、ハ、ハ。久しぶりの水なぶり、寄つて見をろ」

と、尻引つからげ、『遁さじもの』と追つ駆けしが、

妻平「いや待て暫し。旦那の御用、国行殿を尋ねん」

と、こゝに死骸のあるぞとは『いかで知るべき』と読みたりし、歌の中山志し、足に任せて急ぎ行く。

奴の、この／＼この若者、手柄者器量者とは褒めぬ者こそなかりけれ

渋川使者の段

我は君故雲井の紙鳶よ、登り登りて今は只、いとしか
らうであるまいか

爪音高き調べの糸、人目も恥も思はくも、恋には厚き
薄雪姫、今宵殿御と逢瀬の首尾、待つ身に長き入相の、
鐘に漸う園部の左衛門、契約の時違へじと、案内聞い
たる姫の寝所。枝折戸ほとく音つるゝ。

籬はそれとさし心得、掛金しやんと入れ参らせ、

籬 「サア姫君のお待ち兼ね。これからは案内要らず、
ずるくべつたり、ぴつしやり」

と、心利かして立て切る襖、忍び逢ふこそわりなけれ。
かゝる折節秋月が家来渋川藤馬、ちがくと一間に通
り。

渋川 「ヤア籬殿、奥方はお休みないか。ちと密々に御意
得たい。取り次いでおくりやれ」

と、思ひ掛けなき渋川に、

籬も『ハツ』と胸に堪へ、『ひよんな所へ藤馬面』と思
へどわざとそらさぬ顔、

籬 「オ、どなたぢやと思ふたれば藤馬様。オ、顔の疵
で見違へた。そりやまあなんとされたえ」

渋川 「さればく、園部の左衛門が奴めを、六波羅の
御前で手ひどい目に合はしたれば、その意趣返しを清
水で出つ喰はし、あつちは大勢、こつちは藤馬只一
人。日頃手練したる当て身、柔術で半死させたが、卑
怯未練な奴め。組み敷かれながら、おれが顔を熊鷹
爪で搔いて搔いて掻きみしたその疵跡。なんぼ兵
法の達人でも、あゝ搔かれては堪らぬ」

と、口から出次第、真赤な面をかゝへて間に合ひ嘘。

籬も可笑しさ堪へ兼ね、

籬 「ほんにお前も氣転が利かぬ。あつちから搔くなら
ば、こちらにも負けぬ様に恥をかいだが良いはいな」

と、笑ふて奥へ走り行く。

藤馬は座敷にとほんとして、見遣る障子に影法師。

『左衛門様、姫君様』と女中の声々聞こゆるにぞ、

渋川 「さてこそ噂に違はず」

と聞き耳立つる後ろより、

幸崎の奥方、籬を伴ひ立ち出で、

奥方 「オ、珍らしや藤馬殿。夜中といひ慌しく何事
ぞや」

とありければ、

渋川 「イヤ、お氣遣ひな事でなし。密々申し上げ度き子
細と申すは、御息女薄雪様のお身の上、兼々主人も婦
妻に申し請け度き望み。御存じの通り武芸に於ては肩
を並ぶる者もなき大膳殿、聳に取つても不足はあら
じ。拙者が内証にてこの事申さんためばかり、今宵
密かに参つたり。何卒お請けの御返答承れば、渋川も
大慶」

と、慇懃に相述べれば、

奥方 「これはく何事かと思ひしに、人並みならぬ娘
でも、御懇望とあれば親々の悦び。さりながら、夫伊
賀の守も六波羅殿より急のお召しで参られ、未だ御前
を下られず。帰られ次第姫にもとくと言ひ聞かせ、成

る成らざるはこの方から、そなたまで返事しよ」

と、寄らず触らぬ挨拶に。

藤馬傍へ躰り寄り、

渋川 「憚りながらそれは悪い御合点、てゝ御のお耳へ入
つてはもう表向き。娘は母に付くとは下世話にも申せ
ば、御母公の呑み込みで、何卒只今よろしき御返事承
りたし。急に御返事聞きたいと、申すも藤馬がお為を
存ずるから」

奥方 「ムウ、その為とは何がお為」

渋川 「されば、大名でも町人でも背丈伸びた娘には、得
て虫が付きたがり、忍び男を拵へ親々の顔を汚すは世
間に間々ある習ひ。そこを拙者が請け込み、急に御相
談と申すが、なんとお為であるまいか」

奥方 「黙れ藤馬、さては娘薄雪に忍び男があると当て付
けて言ふのか。幸崎伊賀の守の娘ぢや、龜相言ふたら
赦さぬぞ」

渋川 「ア、イヤ、お赦しなされうがなされまいが、満更
ない事は申さぬ。お望みならばお目に掛けう」

奥方「ヤア推参な。娘の詮議ねその方には頼まぬ。夜中
といひ夫の留守に来るさへあるに、屋敷の内を家探し
するか。ならば見事にして見よ」

と、長押に掛けたる長刀追つ取りかけ向かへば、
さしもの藤馬も奥方の、気色に恐れ敗亡し、

洪川「こりや手ひどい、赦せ、赦せ」

と逸散に、後をも見ずして立ち帰る。

母上長刀からりと捨て、つかくくと寄つて御寝所の障
子、さつとばかり引き開け給へば、

籬は『ハッ』と氣も消え消え、

内には二人がぐんにやりと、思はず布団を引つ被り、二
度の汗をぞ流しける。

奥方「これく左衛門殿。隠るゝ事はちつともない。

姫もこゝへ、叱りはせぬ。良い事言ふて聞かさうぞ」

と、常に変らぬ母上の、詞に

いと薄雪も

左衛門も、共に底氣味悪く顔も得上げずひれ伏せば。

奥方「才、二人共に、親も赦さぬ転び逢ひを、この母に

見咎められ当惑は尤も。今の藤馬が言ひ分一々聞いて
か、無理でないぞや。娘持った親々の良い後覺。この
事世上へ聞こへては、園部、幸崎の家の疵。そこを思
ふてこの母が、今二人を夫婦にする」

と、思ひ掛けなき一言に、

娘もびつくり

左衛門も、夢に夢見し如くなり。

左衛「御両親のお赦しもなきに、忍び逢ひしは我が誤
り。真平御免下さるべし」

と、恐れ入つて詫びければ、

奥方「さればいの、娘がいとしがる左衛門殿の誤りにせ
まいため、今宵俄かの取り結び」

薄雪「サア母様こそそのお心なれ、父上がなんと仰

ろやら、氣遣ひに存じます」

奥方「あの言やる事はいの。そこをぬかつて良いもの
か。よしまた父御が如何様に仰るが、思ひ逢ふた中
を夫婦にするを、誰がなんと言ふものぞ。表向きの儀
式は追つて。今宵はさつと内々の祝言を取り結ばん。

まづく祝ふて熨斗昆布。それく」

とありければ。

お傍の腰元入れ替り立ち替り、心ばかりの蝶花形、
高砂や住吉の、浜松の音と、取り取り

評議の段

謡ふ折こそあれ。

館の主幸崎伊賀の守、

後に続いて六波羅の執権葛城民部の丞、刀箱携へ

秋月大膳、

園部の兵衛

三人を誘引し、立ち帰る屈託顔、

思ひ掛けなき園部の左衛門、俄かに隠るゝ方もなく、

御台親子も人々の気色に驚くばかりなり。

伊賀の守、妻子に近付き、

伊賀「この度、娘薄雪と園部の左衛門に御詮議あつて、
只今皆々来たられし。謹んで承れ。ナニ民部殿、大

膳殿、御苦勞さふ。いざまづこれへ」

とありければ、

上使の権柄つかくと、上座に通り座を改め左衛門に
向かい、

民部「聞けばその方、これなる薄雪姫と心を合はし、天
下を調伏せらるゝ由、紛れなし」

左衛「こは、何故に左様の事御上聞に達せしやらん」

民部「されば、この度六波羅の御用に付き、来国行に
打たせたる影の刀に、その方が調伏の鑓目を入れさ
せ清水へ奉納したると訴へにより、御前にて御吟味を
遂げられしに、いよく天下調伏の鑓目に違ひなき

と、詮議一図に極まる。サア、いづくの誰が謀叛に与
し鎌倉を恨み奉るぞ。有り様に白状、白状。言訳あら
ば我々が聞き届け、その通り言上せん。これこそそ
の方が奉納したる影の太刀」

と、差し出だせば、

手に取り上げよくく見れば、

左衛「南無三宝、以前見しとは違ひし鑓目」

『ハツ』とばかりに仰天し、暫し詞もなかりしが、

左衛門「弓矢神も照覧あれ、この左衛門が身にとつて微塵毛頭覚えなし。ム、察するところ意趣ある者の仕業」

と、言はせも敢へず

父の兵衛つかくと寄つて、我が子の髻引つ掴みぐつと捻ぢ付け、

兵衛「エ、おのれ憎い奴。これ程の事仕出しながら、この期に及んで意趣ある者の仕業と、武士の口から未練な事よう抜かしたな。言訳なくばなぜ潔く切腹せぬ」と、立派に言へど子を思ふ、

心は同じ母上、

奥方「ノウ伊賀の守殿、御上使の今のお詞では、さのみ娘薄雪に御詮議のあらう筈もなし。六波羅殿の御前でこの方の娘は存ぜぬとなぜ仰れなんだ」

大膳「イヤく奥方、そうでない。幸崎殿もそれに抜かりはなけれども、息女も科は遁れぬ」

と大膳が懷中より、姫の手跡取り出し、

の鑓目を入れさする互ひの合図に違ふまじ。また、

『左衛門様参る、谷蔭の薄雪より』『今こそは雪氷と谷蔭に身を潜むるとも、後には雨霰となつて名を万天に上げよ』と左衛門を祝せし判じ物」

と利を非に曲げる大膳が、口先に言ひ廻され、さすがの母も『ハア、ハツ』と、姫に取り付き縋り付き。

奥方「コレ姫、なんと思ふてあの様な大それた事して給つたの。もう外に言訳ないか、あるならあるとサ早う言や。なければ科は遁れぬはいの。万一そなたの身の上、もしもの事があつたらばこの母はどうせうぞ」と、膝に引き寄せ抱き締め、人目も厭はず泣き給ふ。

左衛門「イヤく、御息女の知られた事でなし。言訳立たねば科はこの左衛門一人。さりながら、只今にては何を証拠に言訳致さん様もなし。この影の刀を奉納の砌、米国行も同道。拙者が業でない事は、国行がよき証跡なれども、この者も清水より国遠して、今に於て行き方知れず。彼が在り処を探すまで、御前は上

大膳「これ見られよ。刃の下に『心』といふ字を書き、『左衛門様参る、谷蔭の薄雪より』へへへ、これが左衛門と一所といふ慥かな証拠。息女の手跡見知りがあるう」

と差し出せば、

姫は覚えの判じ物、言訳あれどこの中で、あからさまに言はれもせず、『どうか、かうか』と躊躇ひしが、漸うに顔を上げ、

誓「皆様の手前も恥しい事ながら、これなる左衛門様にふと馴れ初め、『いつくの夜に忍び逢はん』と書いて送る合図の文。人の見るを厭ひ刃を描き、下に心を書いたるは『忍』といふ字。谷蔭の薄雪とは『打ち解けて忍び逢はん』と心を知らずする判じ物。愚な女の筆ずさみ、お目に止まつてお咎めに逢はふとは、夢々知らぬ母様」

大膳「ア、イヤくその言訳暗い、暗い。これ、この刃の下に『心』といふ字書いたるがお咎めの第一。『心』は即ち『なかご』と読ましむ。刀の茎に調伏

使のお取り成し、偏に願ひ奉る」

と、詞も未だ終らぬところへ、案内に連れて清水轟坊の使僧、国行が死骸戸板に乗せ、

使僧「この死骸、本堂の塵落しに捨て置き候故、夜中なれども六波羅へ御注進申し上げ候へば、この儀について各々方これへ御出で、『直ちに持つて参れ』との御指図に任せ、伺候仕り候」

と訴ふれば、人々驚き、手燭照らせよく見れば、国行に紛ひなし、

民部「ム、早速の注進出来したり。殺し人はこの方より詮談せん。まづく死骸を片付けよ」

と、民部の詞に

従ふて、使僧は寺に帰りける。

大膳片類に笑みを含み、

大膳「斯様の事は昔もその例あり。佐々木の三郎盛綱が藤戸の先陣を望み、浦の男に海の浅瀬を習ひ、また

もや人に語らんかと手に掛け海へ沈めしとは誰知らぬ者もない。この国行もその通り。『調伏の鑢目を入れさせ、密事を人に語らんかと切り殺し捨てたり』と、六波羅殿のお疑ひの立つは定(じよう)のもの。言訳の筋もこれですらりと切れ果てた」

と、聞くに

左衛門胸轟き、頼みも力も落ち果てゝ、途方に暮れたるばかりなり。

二人の父は黙然(もくねん)と、物をも言はずゐたりしが、

伊賀「なんと思はるゝ兵衛殿、この上はもう言訳どころでなし。御上使に願ひ、二人の子を親々が預り、かゝる悪事に徒党したる奴(やつ)ばらを糾明(きうめい)させて、一々(いちいち)に白状(しやうじやう)せうぢやあるまいか」

兵衛「実に尤も、幸崎殿の言はるゝ通り親々の面晴(めんは)れ」と聞きも敢へず大膽

大膳「ア、イヤ、そりや御兩人の了簡違ひ。万一白状せぬ時は、親の詮議(せんぎ)が緩(ゆる)さと人の疑ひ立ち申す。ム、ム、中を取つて兩人ながらこの大膽が預り、随分(いた)分(ぶん)は

り白状させん」

と言ふを

民部が引つ取つて、

民部「イ、や、某(それ)存(ぞん)ずるには、左衛門は幸崎の家に預け姫はまた園部の家と、兩人の子を取り替えて詮議あらば、依怙(えこひ)贖(ひき)戻(かへ)の沙汰もなく、双方の願ひも立つ」

と、否(いや)応(おう)言(ごん)はさぬ了簡に

二人の父も心を感じ、忝(かたじけ)な涙(なみだ)に暮れければ。

母上娘に取り付いて、

奥(おく)旁(ぼう)「そんなりやそなたは園部殿へ行きやるかや。生れてより以来(いこ)か、一日(いちにち)片時(ぺんじ)も親の手を離れぬに、可愛(こひ)の者やいとほしや。随分と言訳して、目出(めで)たう再びこの母に息災(いきさい)な顔見せてたも」

と、涙の限り声限り、嘆けば

共に薄雪も、母に取り付き縋(ず)り付き、どうど伏して泣きゐたる。

兵衛「ノウ幸崎殿、民部殿の了簡にて互ひに我が子を取り替えるが、お身、見事倅(こ)が詮議(せんぎ)し召さるか」

園部兵衛屋敷の段

出でゝ行く。

『見る石の面(おもて)に物も書(か)ざりし、竹の楊子(ようじ)も使(づ)はざりしに』と、無実(むじつ)を託(か)つ菅家(かんけ)の御詠歌。

いかなれば刀の虚名(きよめい)立ち難く、親と親とに子を取り違へ預けられ、生きる死ぬるの明日知らぬ今日の命ぞ頼みなき。

取り分け園部の兵衛の簾(れん)中(ちゆう)お梅の方(かた)の物思ひ、『嫁は子といひ預りもの、煩(わづ)ひも出(で)やうか』と日に幾度(いくたたび)か問ひ見舞、ほとくと音づれて開(あ)くる一間の座敷牢、

日影(ひかげ)差さねど薄雪の、消えも果つべきその風情。

お梅「コレ簾(まがき)、心の付かぬ。花結びでも続松(つぎまつ)でも始めて、なぜ姫の気を慰めぬ。事にこそよれ品(しな)こそあれ、調伏(てうふく)の謀叛(もはん)のとマ恐(おそ)ろしい企(たく)み事。なんの姫の知りやらう。我が子をよう言ふではなけれども、左衛門に限り、道ならぬ悪事(あくじ)を企(たく)む心はない。まんざらの無実

伊賀「おんでもない事。言はずば拷問に掛けてこの幸崎が白状(しやうじやう)する。手前が娘薄雪も、御自分(ごじぶん)きつと詮議(せんぎ)せられよ」

兵衛「オ、サ、言ふにや及ぶ。火水(かすい)の責(せ)めで言はして見せう」

伊賀「見事見るか」

兵衛「オ、見せる」

と、表は色立つ親々も、萎(しお)るゝ心を取り直し、互ひに我が子を取り替えて、

引つ立て出(で)づる園部の兵衛。

兵衛「御上使はまづお先へ」

民部「しからば左様」

兵衛「幸崎殿、おさらば。御両所、御苦勞(ごくろう)千万」

と、言へど

大膳(おと)空(そら)嘯(ささ)き、挨拶もなく目礼(めれい)ばかり、

引き別れ行く親子の嘆き、

姫も園部も顔と顔、ちつと見るのが暇(いとま)乞(こ)ひ、泣く泣く館を

災難とは鏡に掛けた事。ハテ小歌にも、『北山時雨、曇りなければ晴れて行く』とは歌はぬか。やんがて世を広うざぐんざ歌ふ。苦に持ちゃんなや」とありければ。

薄雪「ア、もう仰つて下さりますな。お館へ移つてから、毎日毎夜のお心遣ひ御勞り、あまり冥加恐ろしい。道を申さば私こそお宮仕へ申す筈を、逆様な世の中。万に一つ言訳立たぬに極まつて、いかなる罪に逢ふとても、左衛門様の名は流すまい笑はれまいと、心に覚悟極めたれば、苦に持つ事はなけれども、今一度逢ひたい、お顔が見たいばかり」と

と、声より涙先立てば、

お梅「有り様はおれも逢ひたい、見たい。エ、聞こえぬは清水の観音様。余所での事でもあることか、目の前で起こつた大難。『左衛門夫婦の者は知らぬ、これくぢや』とつひ一口仰つて下さつたら、この憂き目はあるまいもの」

と、恨むは仏、袂にも掛かる涙の折柄に。

この妻平。在所は大和、当麻寺の近所ぢやげな、心安う、あれが所にいつまでも。とは言ふものゝ近い内、良い便り聞かせましょ。早うこゝを退いてたも。用意しや」

と、気を急けど、
淑やかに手を支へ、

薄雪「末の末まで思し召しやられて、『落ちよ』とある御恩徳、仇疎かには存じませねども。左衛門様に憂き目を見せ一人助かつて何にせう。ならう事なら、私がとゝ様と談合なされ、左衛門様も一所に落としまして下さんせ」

お梅「姫、愚かな事言やる。そもじを大切に世話焼くも、可愛ひ左衛門がいとしがる人ぢやによつての事ぢやぞや。あれを残してなんの憂き目を見しよぞいの。その案じはせずとも用意しや。籬、何を思案顔、勧めて支度させぬか」

籬「ア、イヤ、そうは」

お梅「そうはとは、姫を連れて落ちぬ気か。なぜ言ひ付

園部の兵衛しづく」と立ち出で、

兵衛「ホウ姫、夕べより逢ひ申さず、変る事もなかりしか。さてお身達が落着、この程よりつくづく思ふに、金輪奈落の底までもお身や倅が業ではなく、斯様々と訴へし秋月大膳が結句物臭しとは察すれども、それと言ふべき証拠もなく、うかく日数を経る内に御沙汰厳しく、六波羅殿の手に渡りてはいかなる責めを受け、科なき身を闇々と責め殺されんも計られず。この頃心にこの事ばかり。奥ともやつ返しつ、とつおいつ分別し、密かにこの所落とす所存に一決せり。籬も姫の供の覚悟。妻平、妻平」と

と召さるれば、

妻平「ハッ」

と答へて杖草鞋、旅の調度を取り認め、早支度して畏まる。

お梅「姫、聞きやつたか。預ける方は一門一家衆多けれども、知行頂戴の衆へは遣らぬが秘密。姿はさもし奴なれども、心を見込んで左衛門が草履取らせた

ける事を背く」

籬「ア、イヤ、御意を背くではなけれども、姫にもなつて御覽遊ばせ。お預りの姫が逃げ隠れ致したらお上の祟り、殿を下手人は知れた事。よし駆け落ち致したとお言訳が立つてから、取り逃がしなされた御不調法、それ程の科はお身に掛かる。その弁へのない殿様ではなけれども、嫁は娘ぢやと思し召し、後の難をお厭ひなされぬお慈悲心。親御様の道は立てども嫁と言はれて一日の御孝行、お宮仕へも申されず。大それたお世話のその上に、また候や後の御難になる事を知つてなんと落ちられう。『お供せう』と申されうか。

伊賀殿が聞かれても『よう落ちた、よう供した』と申されうか。やつぱりこの儘差し置かれ、姫兼々の所存の通り、生きるも死ぬるも左衛門様と御一所の、願ひを叶へてお遣りなされて下さりませ」

薄雪「オ、それく籬、よう言ふて給つた。お志をもどくではなけれども、こればかりはお許されて下さりませ」

と落ちる気色もなかく、言ひ出して心
奥方も、重ねて詞なかりけり。

兵衛声を上げ、

兵衛「何ぢや、落つまい。女の際につべこべと理屈ばつ
たりな。後で兵衛が難儀に逢はふと思はうが、いつか
ないかな言はれざる氣遣ひ。こりや、嫁を娘と思へど
も舅を親とも思はず、言ふ詞を聞かぬからは、最早縁
切つて他人にならうはい。や吠える程縁切るが悲しく
ば、言ひ付ける事なぞ背く。分別しかへ落ちる氣か」

籬「ア、お供申します」

薄雪「アイ、落ちます、落ちます。御機嫌直し、やつぱ
り本の娘ぢやと、仰つて下されと様」

と、どうど伏して泣きあたる。

『またも詞の変らぬ内』と、奥方取々心付け、
漸う庭に下り立てど、歩むも足のうら若き。

お梅「大事の姫を合点か、妻平。兼ねて籬と二人が中、
知らぬではなけれども、ア、若い者のある習ひと許し
置いたも今日の幸ひ、女夫の者しつかと預けるぞ」

と、言ふも涙に曇り声。

兵衛指折つて日を数へ、

兵衛「ムウ、明日は辰の日、禁中のお徳日。明後日は先
君等覺院殿の御命日、この両日は裁断の氣遣ひなし。
この間に伊賀の守に出会ひ、姫が逃げたやらまたこな
たから逃がいたやら、入我我入に手立てを巡らし、
対談の品いか程もあるべし。ア、案じまい、泣くま
い」

と、制する折柄。

当番の取次ぎ罷り出で、

取次「幸崎伊賀の守様よりお使者、御対面あるべきか」
と伺へば、

兵衛「ア、それ氣遣ひ、早や通せ。テサテ思ひ寄らざる
使者、奥も隠れて口上窺ひ聞かれよ」

と、待つ間程なく

伊賀の守の使者、刎川兵蔵、太刀箱携へ立ち出で手を
支へ、

刎川「主人申し越し候は、『預りの左衛門殿御事、何卒

輩「これはお冥加もねえ、若お旦那の奥様お預けなさ
れ、籬殿と不義御赦免、女夫の者とはあんたる事。イ
ヤモ、首と胴とは離れ離れになるとても、姫君に手は
さゝせぬ。憚りながら大船に乗つた様に、ネイく、
ネイくくく思召せ。いざ御出で」

薄雪「と様、か様、おさらば」

と、涙ながらに立ち出づる、

お梅「ノウ落ち着いたら取り敢へず、その儘無事の便り
をや」

と、影見ゆるまで伸び上がり、見送る名残り
行く名残り、心細さは燃る糸の、別れ
別れて、出でゝ行く。

お梅「ノウ殿、お詞の阿堵打つてどうやらかうやら姫は
落とせしが、明日にも御前より沙汰あらば、残つた左
衛門はなんとなる。逃がさうにも落とさうにも人手に
はあり、藻掻いても焦つても思ふたばかり、悲しい目
は見まいか、案じ過ごしがせらるゝ」

申し訳も立ちお命別条ない様と明け暮れ願ひ候とこ
ろ、今朝思ひ寄らず、影の御太刀に天下調伏の鑓を
入れしは我が業なりと明白の白状によつて、即ちかの
調伏の太刀を以て只今首を討ち、その太刀を血の付い
たる儘持たせ進上仕る。しかればこの方の姫も同罪遁
れず、この太刀を以て首を召さるべし。追つ付け御貴
宅へ左衛門殿の首持参し、姫が首一所に六波羅へ差し
上ぐべし』との御事なり」

と、聞いて大きに仰天し、

兵衛「ハア、しなしたり」

とばかりにて、泣くも泣かれずたゞおろく、
『いかに』と見遣る奥方も、保ち兼ねて大声上げ、『ワ
ッ』と叫び入り給ふ。

兵衛心を定め、

兵衛「お使者、立ち帰つて申されうは、『御口上承り、
遣はさるゝ太刀慥かに落手仕る。追つ付け御出でと候
へば御返答具ならず。姫が首討つて待ち申す』と伝
へられよ。大儀、大儀」

とありければ、

使者も泣く泣く帰りける。

奥方^{まう}転び出で給ひ、

お梅「さてもく情けなや。定まる過去の因果ぢやな
あ、と悲しい中に諦めて、了簡してみても恨めしいは
姫のてゝ御伊賀殿、罪も同じ罪、預かるも同じ親と
親。こつちは嫁を娘と思ふて影隠させ、命助けんと世
話を焼く。その日も代えずあちらでは首を切る。取り
取りの人心も大体違ふた事かいの。よし白状したり
とも、やレそれを言ふものと打ち消して、聞き捨て
になぜ沙汰無しにして下されぬ。下さつても恩には着
ぬ。コレ、聾は子ぢやないかいの。エ、無得心な、む
ごたらしい。コレ、この太刀の、これが左衛門が血か
いのう。ア、可愛や」

とばかりにて、二目とも見も遣らず、前後不覚に見え
るが。

お梅「南無阿弥陀仏」

の声諸共、すでに自害と見えければ、

案内させて伊賀の守、首桶抱へ座敷に通り、

伊賀「ヤ奥方、この程はお目に掛からず、最前、使者を
以て申す敢へなき次第、さぞ御嘆き。兵衛殿には姫が
首打ち召されしか。サ、それ聞きたし。コレサクと
かくの答へもなく、奥方どうでござる。我れも姫が最
期の体、未練にはなかりしか、聞いて安堵致したし。

何とぞいふ

と氣を急ぐ程、面の憎さと悲しさと、

不承々々に頷くばかり、いかな返事はせざりけり。

伊賀「ムウ、エ、聞こえた。左衛門を某が手に掛けし
鬱憤、物言ふも無益しいと思召すか。尤も、尤も、
物申すまい。イヤモ何もお尋ね申さぬ」

と、手を拱いて脇目もふらず、ぐつとも言はねば
すつとも言はず、膝を並べて座したるは只木像の如くな
り。

折もこそあれ園部の左衛門、我が家の内も我れながら、
我が身を忍ぶ頼冠り、裏の小門に佇みて、声を細め
て、

兵衛驚き刀もぎ取り、

兵衛「や、死なうとは狼狽^{うろた}え者。子を殺された悲しみは
そちばかりか、兵衛は嬉しからうかやい。現在伊賀の
守は子の敵、その上また、姫が首討つて待てといふ憎
い奴。よし、面当て追手をかけて、薄雪を目の前で
掻き首、彼奴も一所にコレこの刀で相伴させん」

と刀を見、

兵衛「ムウ、これは左衛門が血、左衛門を切つた刀で薄
雪も一所に切れ、ムウ。ム、科は同罪とな。テよく
言つた」

と、立派に言へど瞬きの数いや増さるばかりなり。

表の方に案内し、

案内「幸崎殿御出で」

とのゝめく声、

兵衛「アレ奥、早や来たとな。お身挨拶し恨みがまし
卑怯な詞、必ず必ずお言やるな。追手を掛け帰り次
策、首討つて対面せう。エ、泣き顔せまい」

と、叱り付け、太刀引つ提げて入りにける。

左衛「誰そゐぬか。『左衛門が密かに参りし』と母人へ

申してくれ。誰もないか」

と端々を、風が取り次ぐ親子の縁、

母の耳に聞き取つて、

お梅「ナニ左衛門とや、まだ生きてか。夢ではないか」
と立ち上る、

伊賀「ア、コレく奥方、お待ちなされ。左衛門は
某が手に掛け、首はナコレこの首桶に、なんの左衛

門が来るものぞ。万一見えたならばそれは狐狸か、
『必ず寄るまいぞ』『オ、参るまじ』と契約を背きし
は、人間ではあるまい、たゞしは幽霊かやい。ヤ、左
衛門の馬鹿幽霊、最期に伊賀が勧めし一句、忘れし
か。何に迷ふてこゝへ来た。成仏の道を忘れしか。娑
婆に名残りが惜しいか、狼狽^{うろた}え幽霊、早や消えろ、な
くなれ帰れ」

と大音上、余所に知らせば

打ち頷き、折角来ながらすこくと詞も交さず顔も見
ず、親にも永離三悪道、行き方知らず出でゝ行く。

園部の兵衛、首桶ひん抱へ立ち出で、

兵衛「ヤ、伊賀殿、最前よりさぞお待ち兼ね。先刻口上に仰せ越されし通り、漸う只今支度致いた」

伊賀「ナニ、支度なされたとは、姫が首お討ちなされしか」

兵衛「お指図でござるもの。討たいでは」

伊賀「ドレ、その首、お見せなされ」

兵衛「ア、イヤ、まづ其元のお手に掛けられし倅左衛門が首から見たい」

伊賀「ハテ異なる事に辞宜する人、平にまづお見せなされ」

兵衛「しからば一所に」

伊賀「見つ」

兵衛「見せう」

伊賀「オ、兎も角も仕らん」

と、二人の中に首桶並べ蓋引き開くれば、こはいかに、互ひに通入れたるばかり、両方首はなかりけり。

伊賀の守、につこと笑ひ、

伊賀「ハレヤレ暫くも、もしやと心を苦しめし、さては使ひの口上を悟り、娘をいづくへでも」

兵衛「ア、コレく、その後は申さぬ事。其元の御心底の過分さは、たつた今裏門まで」

伊賀「ア、コレく、その後も言はぬ事。子を思ふ親心は、これ程にも割符が合ふものか。御恩は忘れぬ兵衛殿」

兵衛「伊賀殿、御礼申し上げる」

伊賀「や、これはく痛み入る」

兵衛「この首桶に入れられしは、預りものを取り逃せし代はり、親が一命召されよとの願ひ書でござらうがの」

伊賀「いかにも、我が首を入れるためのこの首桶。貴殿もさこそ」

兵衛「おんでもない、その通り」

伊賀「シテく出仕の御支度は」

兵衛「御覽ぜ、支度仕る」

と、片肌くつろげ胸押し分け、両肌ぐつと脱ぎければ、腹搔き切つて傷の口、しつかと巻いて引つ括り肌着も朱に染めなせり。

奥方驚き縋り付き、

お梅「ノウ情けない。支度々々とお上下でも召す事かと思へば、そりや支度ぢやない死ぬるのぢや。預り人を取り逃して腹切らば伊賀様も同じ腹。お前一人が早まつて、もしお上の御了簡、逃げたら良いはでつひ済んだらお前一人が切り損か」

と半分言はず、

兵衛「ヤイく黙れ。仮初ながら天下調伏といふ罪科、逃げたら良いはで済まうと思ふか。姫を逃がさんと思ふ抑もより、腹切らんとは覚悟の前。兵衛一人腹切つたりと思ふかやい。最前伊賀殿より送られし影の太刀、左衛門が首を討ち、血の付いたる儘持たせやるとの口上。首討つたる太刀ならば、物打ちより鏢元までも血が付くべきに、切先に僅かの血。さては首討つたりとは偽り、命を助け代りに伊賀殿御腹を召され

しとは、一目見て早や知つたり。お身もその太刀手に取りながら、その気も付かず世迷ひ言。それ程理に暗うて兵衛が女房と言はれうか」

と、目に角立つれば、

伊賀「ア、イヤ兵衛殿、そうでない、奥方の不審尤も。伊賀が支度も見せ申さん」

と、肩衣引き退け両肌脱げば、同じくくるく引ん巻いたり。

奥方いと目も開かれず、

お梅「両方お心の合ふた事、竹を割つて合はせた様など申さうか。子故に命お捨てなさるゝお前方は、恩愛もあり慈悲もあり、この母には何がある。親といふ名はありながら、これ程も子に愛想なく、傍にあつゝも我が夫のお腹召すのも夢現。子には慈悲なく夫婦の情けは皆欠ける、恨めしの身の上や、後に残りて子に逢ふて言訳は何とせん」

と、夫子を思ひ身を託ち、心の限り口説き立て、取り付き縋り泣きければ。

兵衛涙を押し拭ひ、

兵衛「テサテ、二人を取り替え預つたその夜より、
今日までの心苦しき。笑ひといふもの、とんと忘れ
た。伊賀殿もさぞあらん。ア、心掛かりの子供は落
す。斯様に覚悟極めたる今の心安さ。六波羅殿への
出仕は直ぐに六道の門出。イザ悦びにひと笑ひ笑ふ
まいか」

伊賀「それよからう」

兵衛「サ、奥も笑やれ。エ、推参者、何吠^ほゆる事がある。夫の詞背くか」

と、睨み付けられ

叱られて、涙一所に、

お梅「ホーホ、ホーホ、ホーホ。エ、才ホーホーホーホーホー」

兵衛「ハ、ハ、アハ、ハ、ハ。ハ」

ハ、ハーハ、アハ、、、、。ハーハーハーハーハー」

伊賀「アハ、、ハ、、アハ、、ハ―ハ、ハ、、
ハ、、ハ、、アハ、、。アハ―ハ―ハ―ハ

1

虎溪コケイの三笑さんしやうと名に高き、唐土もろこしの大笑ひ、

兵衛
「それも三人」

伊賀「これも三人、劣りはせぬ」

と打ち笑ふ、

兵衛「ハ、ハ、ハ、ハ、」

伊賀「ハ、ハ、ハ、ハ」

兵衛心付き、

兵衛 「幸崎殿、時移る。イザ同道」

と立ち上れば、

お梅
「コレノウ暫し」

と引き止むるを、

兵衛
「未練者め」

と突き飛ばす、

伊賀「コレ兵衛殿、そうせまい。館を出づる折節は身が女房もその通り。さな荒けなくし給ふな」

と、共に萎るゝ袖の露、

萩垣はぎがきの蔭かげよりも伊賀いの守まもの奥方おく転まろび出いで、

鍛冶屋かじやの段

奥方「お後を慕ひ先さつぎにから垣越しに皆聞いた。兵衛様、奥様、娘をお助け忝い」

お梅「ノウそのお礼は、コレこの方からも同じ事。奥様なんと思ひ召す。このあじきないお姿を、知らぬ互ひの子が可愛、せめて子供が世に出るまで生きていざつ

て下され」

と、互ひに取り付きつかるゝも、詮方なくく鳴く
時鳥、共に血を吐く憂き思ひ、

涙に噎んで立ちけるが、きつと目と目を見合はせて、傷の痛みによろめく足も弱る心も取り直し、『イザ』と声掛け突き放し、見返りもせぬ弓取りの、死ぬるを的に出でゝ行く、矢猛心ぞゆゝしけれ

水も洩らさぬ親と子の、話仕舞ふて娘のおれん、心しよ
ぎくいそくと。

浴衣片手に、

れん「コレ吉助、マア悦んでたも。兄さんの機嫌も直り
とくさんお帰りなされたからは、そなたの誓文せいもんよも忘
れはしやるまい」

吉傭「オ、誓言は忘れませぬ。男の一言金床よりも堅
い、堅い。したが余り早却過ぎる。下地をとつくと
繕ふて」

「イヤくく、繕ふ事もなんにもない。見やる

- 27 -

通り兄さんのあの気では、長うとゝさんの一つには置かれぬ。三人一所に取つて退き、一日なりとも早う衆がさせましたい。どうぞ女夫になる思案を」

吉助「急にせい、と仰るのかえ。それは私も合点なれど、内方へ弟子奉公に来て、半季そこらの旧功。槌の打ち様、鑢の擦り様はモ大概覚えましたが、肝心の焼刃の湯加減、熱いか温いかは知る事ならず。それではどうも正宗様を養ひませんあだてがない、と言ふて、御様に仕事させましては女夫が養はるゝも同然。ヤこゝが相談、エ、どうぞお前の言ひなしで、親旦那より大事の湯加減、お伝へなされて下さらば、誓文ぞその時は物の見事に養ひます。この分別は」

れん「さればいの。我が子でも心を見定めぬ内は鍛冶の道は伝へぬ、と兄さんにさへ教えさつしやれぬ事なれば、どうあらうぞ。オ、そなたとわしが女夫となれば、聳は子も同然、つひ教えさつしやろ。いつぞはとゝさんの機嫌を見て言ふて見やう」

と話半ばに兄の声、

れん「アレそなたを呼んでぢや。まだ言ひたい事あれど、どこで話そうかぐれもなし。ム幸ひな風呂の中、先に入つて待つてゐる。用を仕舞ふて早うや」

と、勝手口より湯殿の戸、締め括りなき年輩も恋の氣転は格別なり。

折節表に人声して、当所の代官渋谷藤馬が弟、案内もな

くつゝと入り、

有内「ア、団九郎、宿にをるか」

兎「ハア、どなたぞ」

と立ち出で、

兎「ヤこれはくゝ右内様、御用あらば召し寄せられ

いで、冥加至極」

と蹲る、

有内「イヤサ、園部、薄雪、この辺に屈みゐる由、大膳殿お聞きなされ、それ故に毎日々々詮議に廻る。その方には刀の儀について用事あり。サ屋敷へ来たれ」

兎「オ、然らば御供仕らん」

と、羽織引つ掛け出でゝ行く。

吉助はとつばかは、

吉助「エ、べしでもない用に、旨い話の腰折つた」

と、湯殿の口に差し寄り、風呂の戸開けるも無遠慮と、

吉助「おれん様申し、つひ往て来いと仰つたは何の御用。私もそこへ参りませうか。おれん様申し、れん様」

と、言へど答へず、

吉助「こりやどうぢや、持たせ振りか、きしますのかえ。余程にもがゝしたがよいはいいな。その過怠には手拭ひを、かう捏ねて、かう丸めて、美しいその顔

へ」

と、とんと開けたる風呂の中、

娘にあらで親正宗

『ハッ』と驚き敗亡し、絞り掛けたる手拭ひも、手持ち無沙汰に見えにける。

正宗「吉助、浴衣」

と何気なき、

詞に少し氣も落ち付き、

吉助「申し親旦那、お背中でも流しませうに早いお上りなされ様」

正宗「ヤイ、これが温うて入らるゝものか」

『ハッ』と心得差し燻べる

節木作りの堅親仁、浴衣引ん巻き風呂の敷居に腰打ち掛け、

正宗「くわつと焚け、早う焚け」

と年寄の氣のいらくらくと、沸き返る湯に手を差し込み、

正宗「ム、ムこれで丁度良いは。儕も重ねて風呂焚く

とも、この入り加減、サ覚えよ」

と、吉助が腕首取り、湯船へぐつと突つ込み、

正宗「なんと正宗が秘密の湯、イヤサ秘密の湯加減、サ覚えたか」

吉助「ナ、なんと仰る」

正宗「イヤサ、この風呂の湯加減を手に覚えずと、とつくりと心に覚え、再び鍛冶の名を上げ、来太郎国俊」

と、突き放せば

仰天し、

国俊「エ、さては今の風呂の湯加減が正宗殿の刀の湯加減か、ハア」

『ハツ』とばかりに呆れて、詞もなかりしが。

国俊「推量の通り某は来国行が倅国俊。我れ若氣にて家業に疎く、傾城に身を持ち崩し勘当受けたるその内に、何者とも知らず父を討つたるその悲しさ。先非を悔ひても返らず、何卒刀鍛冶の秘密を知り、親の家立つるがせて不孝の罪滅ぼしとこの家へ奉公。思はずも大切な家の業を伝へ給ふ。正宗殿の所存といひ、我れを国俊と知られたるには子細であらん」

正宗「ア、愚かな事を言ふ人ぢや。姓は道によつて賢しとやら言へば、こなたが身の上も国行のお死にやつたも、知つてゐるはいの。が折節そなたが刀鍛冶に奉公望む、器量、骨柄、良い男ぢやに、なぜ職人に奉公するぞと、見れば見る程幼な顔に見知りある来太郎国俊。さてはこの家に頼つて刀鍛冶の秘密を知り、絶えたる来の家を取り立つる心よな。ア、若いが奇特。我

が子の悪者めに引き比べ、志を感じしが、心を感じたばかりでは家業の大事は教えられねども、元この正宗はその方の祖父来国吉の弟子。幼少より旧功せしかば我が子の如く不憫を掛け、一子相伝の秘密をモ残らず我れに伝へられしが、『子より外へ伝へじ』と神文を書いたれども、風呂の湯加減教えまじと、誓紙も書かねば誓ひも立てず。今日只今不思議にも師匠の孫に巡り逢ひ、風呂の湯加減教ゆるも、師匠へのサ恩返し。ことに我が娘との様子も聞けば、へ、満更他人の様にものなし。コレ必ず兄の悪者めにこの事を沙汰せられな」

と聞くに

嬉しく国俊、

国俊「再び来の家を引き興し、冥途の父に勘当を赦さるゝも、偏に正宗殿の御高恩」

と、大地に頭を擦り付け擦り付け、忝涙に暮れあたる。

刀の御用承り立ち帰る団九郎、

正宗「見咎められては事難し。コレ吉助、背擦れ、早う、早う」

とさあらぬ体にもてなせば。

門口より高呼ばり、

団九「サア、サアくくく急に忙しうなつて来たぞや。『今日中に刀を打つて六波羅殿へ差し上げい』と代官所より厳しい言ひ付け。片時も油断はなるまい」と、急けども

急かぬ名人気質、

正宗「こんな事もあらんかと、兼々用意したる金床下ろし、焼刃渡すまでの事。いつもの通り兩人は相槌の用意せよ。我れも静かに装束せん」

と、打ち連れ

てこそ入りにけれ。

細工場には注連引き渡し、弟子と息子を右左、中央には五郎兵衛正宗、素袍の袖清らかに淨めの燵打ち掛け、打ち掛け、轆にかかり、金床に刀を据え天地四方を礼拝し、

正宗「仰ぎ願はくは鍛冶の氏神天目一箇の神慮に叶ひ、我が今打つ刀にて、悪魔降伏なし給へ」
と、心中に祈念すれば、
二人は槌を取り取りに、てうくてんくく陰陽の、数に合はしててんくくからり、てんくく天下に希代の名鍛冶、秘密を尽くし ◎

打ち納む。

『すでに焼刃の湯加減』と刀を湯船に差し入るれば、夕紅の日を海に注ぐが如く、湯煙四方に立ち昇り、物の文色も見えざれば。

槌投げ捨て、団九郎、焼刃の湯船に手を差し込み、湯加減探つてみる所を、

金床下ろし振り上げ、右手の小腕打ち落とせば、

『ウン』とのつけに反り返り。

苦しむ声に

妹は、驚き一間を走り出で、

れん「ヤア兄さんか、いとをしや。いかに仕落ちあればとて、余りむいといと様」

と、見れば

見交はす父の怒りの顔はせに、

国俊も詞なく、手負ひを労るばかりなり。

深手も屈せぬ我武者もの、

團九「こりや、こりや親仁め。この団九郎に何科あつてこの様に切りやつたぞいの、切りやつたぞいの。世間の親はな、子に家業を譲りたがるに、和御寮は我が子に刀の湯加減知らすまいとて、こ、こ、この腕を切りやつたか。親は仏に例へしもの、おれがためには地獄の獄卒、もう親子でもなんでもない」

と、弓手の腕でむしやぶり付くを

引つ外し、背骨も折れよと踏み付け、踏み付け、

正宗「ヤイ倅め、なんの科で切つたとはようもく吐かしたな。齊常々洪川藤馬と状通、マ合点が行かぬと思ひしが、大膳が悪事に与し、園部幸崎の両家を潰し、国行が死んだも儕が業であらうがな」

團九「こ、こ、これ親仁、そりや何言やるぞいの。園部左衛門が国行に調伏の鑪目を入れさせ、清水へ奉納

せぬ、涙、涙ばつかりエ、零さしをる」

と、嘆けば

娘も共涙、

覚えある罪科に団九郎も身を悔み、誤り入つたる風情なり。

始終を聞くより国俊も感じ入り、

團俊「イヤモ、善悪に付け子を思ふは親の習ひ、取り分けて御親父の心底驚き入る。いかに我が子のためなればとて、切りも切つたり、鍛ふたり。金床下ろしのこれ程に切れしは名作、日の本に業といひ心といひまた類ひなき正宗殿。只今の物語にて父が敵も推量に違ひはせじ」

正宗「オ、大膳が所為といひながら、その方がために倅めも親の敵同然。如何程娘が思ふともその敵の妹に添はれもせまい。さりながらこ、こ、一つ国俊への頼み。親の氣といふものは、悪い子程なほ不憫なはいの。子の手を切るは一命を取る程に悲しいが、その手を切つたは親子の手を切つたも同然。親子の手を切るから

したは、誰知らぬ者がないはいの。これ程慥かな事をおれが仕業とは、何を証拠に」

正宗「イヤ、イヤく吐かしをるまいてや。言ふに及ばぬ事なれども、来の家は四筋にて横鑪。最前国行が打つたる影の刀を見れば、三筋にて正宗が流義の筋違鑪。右を上げ左を下げて逆にするが調伏の鑪目、我が家の秘密、外に誰が知る者があるぞ。大膳に頼まれて儕が業に極つたはい。何とこれでも抗ふか。その悪い事したほでぶしを打ち切つたは、こりや過りぢやあるまいが。ア、悪い事は覚え易いものか、どうした事にか調伏の鑪目覚えて、モ大それた事仕出す奴に、秘密の湯加減教えなばまだこの上に大きい悪事に与し、腕切らるゝばかりか、ソ、それ、その首が落ちやうも知れぬはい。親はそれが悲しさに手を切つたは慈悲ぢやはい。不断儕が根性の直らぬを見据えた故、六十に余つて傾城買ひの真似をして金銀を貯へたはこの妹が可愛さ。子が無うて泣く者ないと世話に言ふに違はず、屈強な子がある故に、後生一遍願ひは

はこの団九郎とその娘は赤の他人。敵の妹を女房に持つと言はるゝ事もあるまい。子の手を切つた代りには娘と仲良ういつまでも、夫婦の手を、これ、必ず、必ず切つてばし下さるな。兄めも疵本復して根性も直つたら、おれが目を塞がうともその方がおれに成り代り、庖丁でも打たして、てば正宗となりとも、左となりとも、どうぞ言はして下され」

と、老いの繰言取り交せて、義強き親仁も保ち兼ね、『ワツ』とばかりに泣く涙、落ちて流れて鞆場の炭火も消ゆるばかりなり。

かゝる折から園部の左衛門、薄雪姫を肩に引つ掛け息を切つて走り着き。

左衛「卒爾ながらこの家へちと御無心が申したい。御覧の通り女を連れ敵に出で逢ひ事急に及んだり。暫く影を隠してたべ」

と、頬冠り取つて入るを見れば、

團俊「ヤア、お前は左衛門様か」

左衛「国俊か」

国俊「これはく珍しや」

と、互ひの難儀を取り交せて、語るも聞くも涙なり。

国俊「何か差し置き、国俊がまづ吉左右を申し上げん。

子細はこれなる正宗にたつた今承る」

団九「イヤ、その子細は団九郎が直にお話し申さん」

と、疵痛みせぬ剛氣者、流るゝ血を押し拭ひ押し拭ひ、

団九「お見知りもあらん、拙者は正宗が倅団九郎。当春

六波羅に召されし時、非道とは知りながら、欲に耽り

大膳が悪事に与し御両所を科に取つて落とさんため、

影の刀に調伏の鑪目を入れさせ、その場にて人知れず

国行を討つたるも大膳が仕業。この事他言致さじと誓

言を立てたれども、御覧の如く腕を切り落として父の

諫言骨身に泌み、本心に立ち帰る」

と、語れば

父も妹も、悦び合ふたる時しもあれ。

藤馬が弟洪川右内、大勢引き具しどつと駆け付け、

右内「園部薄雪兩人をこの家へ付け込んだり。物な言は

せそ込み入つて家捜しせい」

とばらくと駆け入るを、

国俊戸口に立ち塞がり、

国俊「ヤアどこへく、儂らが主の悪事今日只今明

白に頭はれたり」

左衛「オ、その証拠はこゝにある。大膳が片腕とも頼

まれたる団九郎なれど、肝心のその片腕を切り落とさ

れ、有りの儘に白状した。主従共に首差し延べて観念

せよ」

と呼ばれば、

右内「ヤア、さては団九郎めが二心、もうこの上は

彼奴ぐるめに討つて取れ」

と下知すれば、

兩人『得たり』と影の刀、金床下ろしを打ち振り、打ち

破り、

国俊「親々の鍛はれし刀の切味試みよ」

と、閃き渡る太刀風に

家来は逃げて行き方なし。

国俊「木守りの洪川右内、儂も敵の片割れ」

と、引つ挟み切り付くれば、

敢へなく息は絶えにける。

左衛「オ、出来た出来た。この左衛門も大膳が非義非道

六波羅殿へ訴へ、敵討をお願い申し、亡き親々の亡魂

に敵の首を手向けん」

と勇み給へば

国俊も

国俊「諸共に、本望を遂げ再び帰つて舅殿、始終のお礼

申し上げん。まづそれまでのおさらば、さらば」

正宗「早やお往きやるか。追つ付け目出度う吉左右を聞

かされよ」

国俊「オ、氣遣ひしられな。大膳秘術を尽くすとも、我

が剣先の焼刃に掛け敵の首を冠落とし、付き添ふ奴

ばら片端から縦横無尽に勿焼刃」

と、門出祝ふ国俊が、詞に折れなく疵もなく、左衛門夫

婦の御供し、勇み勇んで立ち出づる

(2025. 7. 6)

(場面)		初演太夫	現行段名
上巻	(六波羅館)	紋太夫	
	(門前)	百合太夫	
	(清水寺)	内匠太夫	地主権現花見の段
		志摩太夫	清水寺の段
中巻	(幸崎館)	此太夫	洪川使者の段
		〃	評議の段
	(園辺館)	播磨少掾	園部兵衛屋敷の段
	(うすゆき姫道行)	内匠太夫 ^他	
下巻	(左衛門みちゆき)	此太夫 ^他	
	(五平次住家)	此太夫	
		内匠太夫	
	(正宗住家)	播磨少掾	鍛冶屋の段
(細工場)		〃	〃
	(二条河原)	志摩太夫	